国語

（1～13ページ）

注意

1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2 解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
3 受験番号は、下記の「受験番号欄記入例」に従って正確にマークしなさい。解答用紙にはマーク式解答欄の番号が 1 ～ 50 までありますが、使用しない解答欄も含まれています。
4 試験時間は **六〇分** です。
5 試験開始後、問題用紙に不備（ページのふぞろい・印刷不鮮明など）があったら申し出なさい。
6 問題の内容についての質問には、いっさい応じられません。
7 中途退出は認めません。試験終了後、この問題用紙は持ち帰りなさい。

受験番号欄記入例

受験番号欄				
Y	8	1	5	0
●	⓪	⓪	⓪	●
	①	●	①	①
	②	②	②	②
	③	③	③	③
	④	④	④	④
	⑤	⑤	●	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦
	●	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨

数字の位置に注意してマークしなさい

アルファベットを除く４ケタの数字を記入しマークしなさい

マーク式解答欄記入上の注意

1．解答は，ＨＢの黒鉛筆を使用して丁寧にマークしなさい。

《マーク例》

良い例 ●

悪い例 ◐ ◔ ⊗ ◔ ○

2．訂正する場合は，プラスチック消しゴムで，きれいにマークを消し取りなさい。

3．所定の記入欄以外には，何も記入してはいけません。

4．解答用紙を汚したり，折り曲げたりしてはいけません。

Ⅰ　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

常識が「私」の自由意志という場合、それは私の行動の最初の原因となるもの、まずは私の身体を支配し、それを通じて外界にも働きかける行動を起こす力を意味している。もちろん常識は外界の抵抗の巨大さを知っているから、さしあたって意志とは私の身体そのものを支配し、身体の抵抗を排除してそれを自由に操る力だと考えてきた。逆説的に聞こえるが、ここから自由意志はしばしば不羈奔放（ふきほんぽう）な行動とは正反対の営み、自己抑制的で道徳的な行動の原動力として捉えられてきた。

哲学もまたこの常識を受け継ぎ、たとえばカントの自由意志は人間の自然な「傾向（Neigung）」、［ア］生理的、社会的な欲望を抑えてそれと闘う力として定義されている。振り返れば意志のこのような捉え方こそ、「私」の特権性を保証し、その権威と尊厳を確保するのに大いに貢献したと考えられる。いうまでもないが、そのさい何ものにも支配されず、それ以前の何ものにも起因せず、純粋に能動的に働く力を思い浮かべるにつけては、伝統的な神の意志の連想が働いたことはまちがいあるまい。

しかし少し考えればわかることだが、この自由意志論には決定的な欠陥が潜んでいる。なぜなら神の意志は恒常的に不変かもしれないが、人間の意志は随時、随所に芽生えるほかはないものであって、そうであるかぎり、それを特定の時と場所に芽生えさせる別の力を探さなければならないからである。かりに私がまったく自由に旅に出ることを決意したとしても、私はその決意をいつどこでしたかを自由に選びとったわけではない。万一、その決意の時と場所を自由に選べたとしても、今度はその先行する決意の瞬間と場所を選ぶ自由が問われることになって、自由意志の最初の発動の時点は無限ソコウ（a）するほかはないだろう。

そう気づいてさらに反省すれば、そもそも私は旅立つこと自体を意識的に、複数の選択肢のなかから選んだわけではなかったことにも気づく。ここにも逆説があって、もし私が複数でしかも有限個の選択肢のなかから旅を選んだとすれば、ただちに私はその選択肢の全体を選んだ意志を探さなければならない。もし選択肢が無限なら私はそのすべてを比較することはできず、［イ］選択もできないわけだから、どうしてもこの選択肢を限定する意志の存在を仮定するほかはない。そのうえ、この意志は最初からひそかに旅を選択肢の一つに加えていたのだから、私に真に旅を決意させたのは、私の知りえないこの［A］だということになる。

素直な実感もこれを感じとっていて、たいていの決意をする場合、私はなぜかその決意をしてしまっていたことに気づき、決意をするべく何ものかに導かれていたことに思いあたるのが普通である。自由意志を妄信する常識も半ばはこれを認めていて、しばしば行動を決意するにさいして「する気になる」という表現を使う。する気になるのは気分が晴れているからであり、なぜか体が軽いからであり、あるいはそうするように習慣づけられているからであって、ここには神秘的なもう一つの意志を仮定する必要すらないはずである。

とくに意志と身体の関係についていえば、意志が積極的に身体を支配し、細部にいたるまでそれを操作し、いわば自由に振る舞うということはありえない。すでに触れたように一見、意志は身体にたいして否定的な支配力を持ち、禁欲というかたちで身体の行動を制限する自由を振るうようにみえる。［ウ］子細に見れば、禁欲はそのほとんどが宗教的、文化的な社会慣習にもとづいていて、私の意志に先立つ規制力によって強いられている。現に自由意志を道徳の基盤に据えたカントの場合でさえ、彼が具体的なトクモク（b）としてあげた規制を見れば、そのすべてが十八世紀のキリスト教社会の慣習だったことがわかる。

もしキョクタン（c）な例として身体を抹消するような自由意志があるとすれば、それはただ一つ自殺の意志だろうが、これも身体の要求に真に逆らった自由を持つとは考えられない。現実には、さまざまな社会的、生理的な

苦難が身体の力を衰弱させ、生きる意欲を失わせた結果が自殺だと見るほうが正確だろう。そのうえ自殺はすべての意志を消滅させる行為なのだから、これはむしろ意志による身体支配を放棄するクワダ[d]てと呼ぶべきにちがいない。

いわんや、意志が積極的、肯定的に日常茶飯の行動を支配することは、これまでくどいほど述べてきた通り絶対にありえない。随時、随所に発生する「する気」に先立つものは、身体それ自体のほかに考えられないからである。空腹が強まれば「食べる気になり」、退屈が鬱積すれば「旅をする気になり」、カントの言うさまざまな自然の「傾向」が私を行動へと駆り立てる。加えて身についた習慣とスキルもまた私を誘い、それと気づくよりまえに身体を働かせる。ほとんどの日課を私は意識せずに果たしているし、上達したスキルがあれば私はおのずからソソノカ[e]されて、それを使う仕事をしようという「気持ちになる」。

言葉というのは便利なものであって、日本人はたまたま国語に「意欲」という言葉があったことの偶然に、感謝しなければならないかもしれない。この単語が「意」と「欲」の二語からなり、意味のうえでも意志と欲望のあいだにあることが便利なのである。じっさい道徳的な用語法でも、意欲という言葉は中立的な位置を占めていて、欲望の放埒（ほうらつ）さとも意志の厳格主義とも明白な違いを感じさせるのである。

そしてこの意欲という言葉をあいだに挟むことによって、欲望から意欲へ、意欲から意志への移行は、にわかに一連の連続的、漸次的な変化であることがみえてくる。それは現象のアスペクト（注）の漸減の過程であり、事物から観念へと移る抽象の過程だともいえる。まず欲望は「漠然たる倦怠（けんたい）」「非日常への願望」、さらに「未知への憧憬」などと、見るからに散漫で多義的な気分として芽生えてくる。この欲望が次いで意欲へと高まると、それらの気分は行動に向けて集約され、「旅に出たい」という限定された方向をさし示す。さらにこれが一層の集約の度を強めて意志に変わると、「いつ、どこへ」「どんな日程と交通手段で」といった、明確な計画が立てられることになるのである。

（山崎正和『リズムの哲学ノート』より）

（注）アスペクト――外見。様相。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一　傍線部a～eを漢字表記に改めた場合、それと同じ漢字を傍線部で用いるものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

1　a「ソコウ」

① 古代の建物のソセキが残っている。
② その作品は私小説のガンソである。
③ 過去にソキュウして法律を適用する。
④ 環境を改善するためのソチを講ずる。

2　b「トクモク」

① 温厚トクジツな人は慕われる。
② 謙譲のビトクが称賛される。
③ 不利な証拠をイントクする。
④ 本を読んでトクシンがいった。

3　c「キョクタン」

① タンマツ装置が多様化する。
② ダイタンな行動に出る。
③ 庭をタンネンに手入れする。
④ 家庭生活がハタンする。

4　d「クワダて」

① 民間キギョウと共同開発する。
② 提案がキジョウの空論に終わる。
③ 計画がキドウに乗り実現する。
④ 平和をキネンして不戦を誓う。

5　e「ソソノカされ」

① 軍事施設のサツを行う。
② 災害で道路がフウサされる。
③ サギに遭わないよう用心する。
④ シサに富む意見が出された。

問二　二重傍線部X・Yについて、その意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

6　X「不羈奔放」

① 道にそむいて勝手なことをしてしまうこと
② 自分を律することができずに暴走すること
③ 取り返しのつかない行動に出てしまうこと
④ 何にも束縛されず思いのままに振る舞うこと

7　Y「いわんや」

① そういうわけで
② それにもかかわらず
③ いうまでもなく
④ いってみれば

問三　空欄ア～ウに補う言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

8

	ア	イ	ウ
①	すなわち	したがって	しかし
②	つまり	しかも	なぜなら
③	あるいは	つまり	たとえば
④	しかも	けれども	むしろ

問四　空欄Aに補う表現として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

9

① 神秘的な意志
② 文化的な慣習
③ 無意識の自我
④ 能動的な意識

問五　傍線部1「哲学もまたこの常識を受け継ぎ」とあるが、どのようなことを受け継いでいるのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

10

① 意志を道徳的な行動の原動力となるものと捉えて、生理的欲望や社会的欲望を抑えるために身体を支配するのだと考えること。

② 意志を常識や道徳の影響を受けて自己を抑制するものと捉えて、身体の抵抗を排除するための特権的な力をもつと考えること。

③ 意志を身体支配を通して外界にも働きかける行動の要因となるものと捉えて、身体を操り自己を制御する力をもつと考えること。

④ 意志を神の意志に基づいた行動の源泉となるものと捉えて、欲望が制御されることにより人間の尊厳が保たれると考えること。

問六　傍線部2「この自由意志論には決定的な欠陥が潜んでいる」とあるが、「決定的な欠陥」とはどのようなことか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

11

① 人間の意志の発動においては神の意志が働いているはずであるのに、あらゆる時や場所で自由に意志が芽生えて、行動を決意させるという思い込みに陥っていること。

② 随時随所に生じる決意を促す自由意志の存在は、何にも支配されないことを前提としているが、どこまでさかのぼって考えてもそれを証明することはできないこと。

③ 意志を特定の時と場所に生じさせたり、意志が決意して選び取る選択肢をあらかじめ与えたりする別の意志の存在を、自由意志の背後に仮定するしかないこと。

④ 純粋に意志が発動して無限の選択肢の中から自由に何かを選び取ることは不可能で、どこかで神の意志が働くと考える、伝統的な思想に回帰することになること。

問七　傍線部3「意志と身体の関係」について、筆者はどのように考えているのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

12

① 意志には宗教や文化に基づく規制力があり、身体の行動を制限する禁欲を強いる。

② 身体の要求に逆らう自由は意志にはないが、自殺の意志は身体を支配してしまう。

③ 意志は身体に対する否定的な支配力しか持たず、自由に振る舞うことはできない。

④ 身体を自由に操る意志は存在せず、意志が積極的に身体を支配することはない。

問八　本文で述べられている筆者の考えと合致するものを、次の中から一つ選びなさい。

13

① 日本語には「意欲」という言葉があることから、意志が欲望に向かう過程が段階的にあることは明白で、欲望が意欲へと高まることで、身体を一定の方向に導くことが可能になり、意志が実現される。

② 人間の意志に先立つものは、ある文化や社会で身につけた習慣やスキルしかなく、それが無意識のうちに何かを「する気」にさせることで随時随所に自由意志が芽生え、それに身体が応えることになる。

③ 身体に先行して意志があるのではなく、散漫で多義的な欲望から意欲へと高まり、曖昧だった気分が行動に向かう一方向に集約され、徐々に意志へと移行して、明確な計画が立てられるに至る。

④ 自由意志を考える場合、常識では行動の決意に際し「する気になる」と表現するので意志に働きかけるものの存在を否定できるが、哲学では神の意志という宗教的な力の存在を否定することはできない。

Ⅱ　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

西欧の探偵小説の翻訳を読み散らかしていた子供の頃、その指し示している当のものがわたしにとってあまり定かな現実感を帯びるに至らないので、これはどうやら自分の生きている日常とややかけ離れた物質的環境に属する言葉なのではあるまいかという漠然とした気持を抱いていた語彙の一つに、「足音」がある。「足音」が聞こえたとか聞こえないとか言うが、いったいどういうことなのかとわたしは訝(いぶか)しんでいたのである。X

小説を読むという体験は、たとえそれが母国語で書かれた文章の流れを辿(たど)る場合であっても、実はそこで用いられている語彙のすべてを完全に理解したうえで読み進めるというわけのものではない。小説の物語に身を委ねること。【A】それは、次々に継起しては自分の中を通り過ぎてゆく言葉の運動のただなかで、自分には馴染(なじ)みのない土地、馴染みのない時代、馴染みのない文化、馴染みのない階級に属する事物や習俗や観念に出会い、それがいったいどういうものなのかどうももう一つぴんとは来ないけれど、ぴんとは来ないなりに、まあきっとこんなようなことなのだろうと当たりをつけながら読者として自分なりの想像世界を築き上げてゆくという体験にほかならない。「当たりをつける」とは、ここで、自身の実体験に基づく記憶や、他の書物から得た知識や、いろいろな聞き齧(かじ)りや雑学などに照らし合わせて類推することであり、そしてなかんずく、その当の小説の内部で、その未知の言葉がどういう文脈において出現し、どういう用いられかたをしているのかを観察することで、何とはなしに理解してしまう、というよりむしろ理解したことにしてしまうという片のつけかたのことであって、1これが出来ない人間には小説を楽しむ資格はないと言える。たとえそれがとりたてて事細かに描写されたり説明されたりしていなくても、その未知の事物や習俗や観念がどういう状況で出現し、隣接しあった単語や行文とどういう関係を取り結んでいるのか、登場人物たちがそれにどういう反応を示しているのかといったことを観察すれば、それがどんなものなのかはおおよそわかるのであり、その程度にわかりさえすれば十分なのである。おおよそわかるというのは、言い換えれば、「実体的」にではなく「形式的」ないし「構造的」にわかるということだ。

たとえば一時代前のイギリスのミステリーを読んでいると、「執事」などというものが出て来て、そんなものはもちろん実物を見たことは一度もないけれど、どういう階級の人々が生きている世界でどういう役割を果たしている存在なのかといったことはだいたい見当がつくので、小説世界を享楽するにはその程度のことでおおかた足りるのだ。英国もので言えば、「ハイ・ティー」とか「パブ」とか「ライス・プディング」とか「フィッシュ・アンド・チップス」とか「ガイ・フォークス・デイ」とか、「貴族」とその「館」とか、「マント」とか「四頭馬車」とか、戦後生まれの日本人の子供にとっては見たことも聞いたこともないものばかりなのだが、たとえその実体をリアリスティックに摑(つか)むことはできなくても、そうした言葉がその小説世界の中で「構造的」に意味している内容の大まかなところを理解しさえすれば、それで不自由はしないということなのだ。【B】「リーフィング・ポイント」とは船のどの部位か、「ジビング」するとはどういう行為のことか、たとえ厳密にはわからなくてもわれわれはスティーヴンスの海洋冒険小説を楽しめるのだし、2そもそも人は、そうした未知の単語との遭遇に魅(ひ)かれてそれを読むのだとさえ言ってもよい。その逆に、おおむねこんなことだろうと「見当をつけ」なければならない未知の言葉が一つもなく、よくよく見知った物事ばかりで進行する小説を読むつまらなさを考えてみればよい。大人が自分の頭の中にある「子供」の身の丈に合わせたつもりで3猫撫(ねこな)で声で物語るいわゆる「児童文学」が、当の子供の読者にとっては退屈でどうにも読めないのは、このことのゆえである。「見当」はもちろん「見当」にすぎず正確な理解ではないから、読み進めるにつれて修正を余儀なくされるYということがあり、まったくの「見当違

い」だったことがわかって［ア］に暮れるということもあり、ぼんやりとしかわからなかったものが不意にくっきりした鮮明なイメージを結ぶということもあり、そうした誤解と啓示の絶えざる揺れ動き、迷うことと道を見出すこととの無数の繰り返しを通じて、小説の読者の想像世界は一瞬ごとに築かれては崩れ、また築き直され、生き物のように輪郭を変えつづけてゆくのであり、かくしてわれわれは、小説の第一ページから最後のページまでの厚みを、或る変容と運動の体験として生きることになる。

【C】既知の言葉ばかりで出来ている読み物は、ただ読書を既存の自分自身にめぐりあわせるだけであり、そうした読書によってもたらされるものは退嬰的な満足にすぎず真の悦びではない。二十四歳のとき初めてイギリスに行き、「パブ」で「フィッシュ・アンド・チップス」を頬張ったときの感動をわたしは今でもはっきり覚えている（もっともあれはそんなに旨いものではなかった）。

一見したところ、「足音」は単なる普通名詞であり、「パブ」や「フィッシュ・アンド・チップス」のような固有に地方的な文化習俗ではないように見える。古今東西、人間が歩いたり走ったりすれば「足音」が響くに決まっているとも言えるからである。しかし、「足音」が聞こえるとか聞こえないとか、「足音」が近づいて来るとか後をつけて来るといった翻訳小説の記述――古めかしい訳者だと「跫音」などという字を当てたりしているのだが――に対して、子供心に何か或る微妙な違和感を感じていたという鮮明な記憶がわたしにはあるのだ。【D】それがとりわけイギリスの探偵小説と結びついて思い出されるのは、正体不明の人物がただ「足音」として、気配としてのみ迫って来るといった場面がそうしたジャンルの作品に多かったからなのだろうか。そう言えばG・K・チェスタートンのブラウン神父ものの一篇にたしか「奇妙な足音」というのがあったはずだ。ホテルの廊下で、ゆったりした物腰でぶらぶら歩いてゆく裕福な青年の足取りと、盆を片手に前かがみになって忙しく歩を運ぶボーイの足取りとを一人で演じ分ける悪漢の話だったように覚えている。人々が革靴で［イ］する西洋ふうのホテルなどとはあまり縁のない日常を送っていた昭和三十年代の日本人の少年にとって、こうした記述が、4「（　Ⅰ　）」を通じて「（　Ⅱ　）」にしか理解できない事柄に属していたとしても無理はなかったと言うべきだろう。

なるほど、わたしの育った街は、細い路地を除けばもうすでにすっかりアスファルトで舗装されてはいたけれど、もとより商店や小さな町工場の多い界隈だったので、行き交っているのはサンダルや草履を突っかけてぺたぺた歩いている人々ばかりで、スーツに革靴で身を固めて通勤するサラリーマンがアスファルトの上に足音を響かせるということはあまりなかった。のみならず、西欧とは異なり、われわれは屋内では履物を脱ぐ習慣になっているという決定的な事実があるだろう。日本の家屋の場合でも人が歩くと木の床が軋むということはむろんあり、また畳という植物繊維の素材にしても、或る人間の立ち居振舞いをその部屋の同席者に或る独特なまなましい感触とともに伝えてよこすといった特性を持っていることはある。裸足でひたひたと歩き回っているだけであるにはせよ、人の歩行が濃密な気配となって伝播するという点で言うならば、日本の木造家屋は西欧ふうの石やコンクリートの建物以上だと思うのだが、しかしそこでの「気配」とは、物理的に反響する「足音」の概念とはやはり根本的に異質なものなのではないだろうか。5わたしが西洋の翻訳探偵小説の中で出会っていた「足音」の一語は、やはり人々が石畳の上を革靴で音高く［イ］している生活環境に深く根ざした語彙、やはり或る地方性の刻印を帯びていて、西欧人が西欧の風土の中から発想し使用している語彙だったのではないだろうか。

（松浦寿輝『青天有月』より）

＊　問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一　二重傍線部X～Zについて、その意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

14　X「訝しんでいた」

① 不審に思っていた
② 不信感を抱いていた
③ 抵抗感を覚えていた
④ 好奇心が生じていた

15　Y「余儀なくされる」

① 無理やり押しつけられる
② 敢えて試みることになる
③ やむを得ずするしかない
④ 追い込まれてしてしまう

16　Z「退嬰的な」

① 物事を表面的に捉えただけで深い理解のない
② 新しい物事を積極的に受け入れる意欲のない
③ 視野が狭く多様な見方を受け止める余裕のない
④ 自分勝手に物事を解釈して真の価値を見出せない

問二　空欄ア・イ（二箇所）に補う言葉として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

17　ア　① 思慮　② 落胆　③ 途方　④ 悔悟

18　イ　① 待機　② 闊歩（かっぽ）　③ 談笑　④ 佇立（ちょりつ）

問三　次の一文の入る箇所として最も適切なものを、後の中から一つ選びなさい。

> 物語に読み耽（ふけ）る子供が、世界を知り初（そ）める体験の一種のミニチュアのごときものをそこから受け取るのはこのようにしてなのだ。

19

① 【A】　② 【B】　③ 【C】　④ 【D】

問四　傍線部1「これが出来ない人間には小説を楽しむ資格はない」とあるが、「これ」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

20

① 小説を読み進めるうちに出会う未知の言葉にいちいちとらわれることなく、小説世界に身を置いて自分の知識や経験を豊かにし、物語の輪郭がなんとなくわかること。
② 小説で用いられている言葉が自分には馴染みのないものでも、その正しい意味を捉えようとするのではなく、想像力を働かせて作者の意図に即した解釈をすること。
③ 小説の世界に身を委ねてどっぷりとつかり、自分が経験したことのない未知の世界を追体験するうちに、未知の言葉の正しい意味が自然に理解できるようになること。
④ 小説に未知の事物や習俗や観念を表す言葉が出てきた場合に、自分の経験や知識に照らしたり用いられ方に注目したりすることで、大体の意味を適当に推し量ること。

問五　傍線部2「そもそも人は、そうした未知の単語との遭遇に魅かれてそれを読むのだ」とあるが、それはどのようなことだと考えられるか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

21

① 読書を通して体験的には理解できない言葉と出会い、その未知の世界について想像することに、人間は喜びを感じるものだということ。

② 未知の言葉で表現された自分の知り得ない世界が描かれている冒険小説に、本来好奇心が旺盛な人間は、心がひかれるものだということ。

③ 未知の言葉との遭遇を求める人間は、既知の世界から逃避したいという願望があり、自分の知らない世界に魅力を感じるものだということ。

④ 人間は小説に描かれる想像の世界で未知なる言葉と出会うことで、誰しも知的好奇心が満たされ、心が成長していくものだということ。

問六　傍線部3「猫撫で声で物語るいわゆる『児童文学』」とあるが、どのような「児童文学」のことを言うのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

22

① 子供の知的レベルを低いものと見なして、複雑な物語を単純化して書き直した文学。

② 子供の関心を引くために、優しい声をわざとらしく出して読み聞かせるための文学。

③ わかりやすいようにと、大人が勝手に決めつけたレベルで子供向けに書かれた文学。

④ 大人が子供に情操教育をする目的で作った、選び抜かれた易しい語彙から成る文学。

問七　傍線部4の空欄Ⅰ・Ⅱに補う言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

23

① Ⅰ 想像　Ⅱ 実体的

② Ⅰ 実体　Ⅱ 形式的

③ Ⅰ 類推　Ⅱ 構造的

④ Ⅰ 経験　Ⅱ 具体的

問八　傍線部5「わたしが西洋の翻訳探偵小説の中で出会っていた『足音』の一語」とあるが、本文で述べられている「足音」に関する筆者の考えとして最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

24

① 少年時代に西欧の探偵小説で出会った「足音」という言葉を、普通名詞ではなく現実味がないものとして捉えていたが、アスファルトで舗装されていない道が多かった当時の自分が理解するのは無理があった。

② 「足音」は人の気配を表すものであり、日本家屋と西欧建築において伝わり方の違いはあるが、生活習慣や風土の違いを超えて共通するものがあり、小説において人物像を表現する言葉として普遍的である。

③ 西欧の探偵小説に登場する「足音」という言葉は、革靴を履いて屋内や石畳の上を歩く生活環境のなかから出現した西欧固有の文化習俗に根ざした言葉であり、単なる普通名詞にとどまらないものと言える。

④ 翻訳小説で「足音」と訳された言葉に子供心に違和感があったのは、当時の日本では革靴を履く人が少なかったためであり、ある社会の生活習慣に全くない物や概念を言葉で表現することは至難の業である。

問九　波線部「小説を読むという体験」を説明したものとして、本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選びなさい。

25

① 言葉を自分のなかに取り込んで空想世界を創造し、実人生とかけ離れた現実感のない世界の中で生きることで、未知の自分を発見する体験。

② 言葉が次々と継起することで築かれる世界に身を置いて、未知の言葉と遭遇しながら、自身とともに移り変わる想像世界を作り上げる体験。

③ 言葉で書かれた架空の世界に身を投げ出して、自身の実体験と重ね合わせることで現実世界を直視し、既存の価値を問い直していく体験。

④ 言葉を通して物語世界を構築しながら空想にふけり、未知のものに対する見当違いの理解を正すことで、自身の語彙を充実させていく体験。

Ⅲ

次の文章は『松浦宮物語』の一節で、渡唐した弁少将氏忠が皇帝の妹華陽公主と琴が縁で商山で出会い、契りを交わしてその後宮中で再会する場面である。これを読み、後の問いに答えなさい。

十月三日にもなりぬ。[1]頼めたまひし、もしまことならむ時と思ふより、いとど心は騒ぎて、かの楼のもとに待ちゐたり。宮のうち、常よりも兵(注1)いつくしく、わづらはしき気色なれど、わりなく紛れ入りたるに、げに月の入るほどいたうも待たれず、出でおはしたるさまかたち、なかなかかの月影よりげにめでたきを見るに、涙は先に立ちて、回廊の石の壇に、ただ時のほど、赤き扉をひきたてたれば、いと暗きに、うちにほひたまへる御衣のにほひなどは、なべての香にしみたるにもあらず、ただ世の常ならずなつかしう、限りなき御けはひ、見ても飽か（a）に、A[かたみにとりあへずこぼるる涙]にくれつつ、何事も聞こえあへず。思ひ入りたるさまいみじきに、女も現し心失せはてて、「それも昔の契りと言ひながら、いとかうあるまじき心遣ひをしつるも、我が心の誤りにもあらず。『琴の声によりて、かならず身を滅ぼすゆゑともなるべし』と、仙人の教へしを思へば、いまこの時なり。これを限り」と思ふとも、人の心のならひ、[2]さてしもえやむまじきわざなれば、つひに乱れ出で来んとす。

「まことに我をしのぶ心深く、[3]あらぬ国にても忘れたまふまじくは、こよひあだの命を失ひて、かならず後の世の契りを結ばむ」とのたまひて、下裳(注2)の腰より、[4]水晶の玉の手に入るほどなるを取り出でて、「つひに我が契りを忘れず、イのたまふままの心ならば、この玉を身放たず持ちて、いみじき雨風の騒ぎ、波の下なりとも、つひに落とし失はで、我が国に帰りたまへ。聞けば日本に泊瀬寺(注3)といひて、観音おはすなり。かの寺にこの玉を持てウ参りて、三七日(注4)その法を行ひたまへ。さてのみなん、この世の人の謗りを負はで、B[かならずふたたびあひ見るべき]」とのたまひて、まだ更け（b）ほどに、隠ろへ入りたまひ（c）名残、言へばさらなり。袖を押し当てて、泣く泣くこの玉を握り持ちて、分け出づる心地、はた商山を出でし暁に過ぎたり。

Ⅰ　さめぬ夜の夢の直路を現にていつを限りの別れなるらむ

公主は、宮に帰りたまひておぼし続くるに、「さまざま憂かりける契りはさらにも言はず、我が心もかうながらこの世に長らへば、かならず憂き名をとどむべき身なりけり」とエおぼすに、よろづに思ひ(注5)とぢめつれば、暗き夜の空をひとりながめて、心のゆく限り御手に任せて弾きすましたまへる琴の音、御垣の松風に通ひ合ひて、言ふよしなくもの悲しきに、稲妻しきりにして、雲のたたずまひただなら（d）ば、

Ⅱ　稲妻のさやかに照らす雲の上に我が思ふことは空に見ゆらし

（注）1　いつくしく――厳重で。
2　下裳の腰――上裳の下にはく裳の腰ひも。
3　泊瀬寺――奈良にある長谷寺のこと。
4　三七日――二十一日間。
5　思ひとぢめ――「思ひとぢむ」で断念すること。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一　傍線部1～4の解釈として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

26

1「頼めたまひし、もしまことならむ時と思ふより」

① 期待させなさったことが、もしかしたら本当である時と思うや否や

② あてになさったことが、もしかしたら本当になるだろうと思ったので

③ 信頼なさったことが、もし本当ではなかった時はと思うけれども

④ ご依頼になったことが、もし実現するような時があればと思うが

27

2「さてしもえやむまじきわざなれば」

① それにしても死ぬのはできないことなので

② そのままで死んではならないことなので

③ それにしても終わりそうもないことなので

④ そのままで終わるのができそうにないことなので

28

3「あらぬ国にても忘れたまふまじくは」

① 他国ではお忘れになるはずなので

② 他国でお忘れになったりしたら

③ 他国でもお忘れになりそうもないなら

④ 他国ではお忘れになってしまうので

29

4「水晶の玉の手に入るほどなるを取り出でて」

① 水晶の玉が手に入ったそうなので取り出して

② 水晶の玉が手に入るほどになったのを取り出して

③ 水晶の玉で手に入ったものすべてを取り出して

④ 水晶の玉で手に入るくらいであるのを取り出して

問二　波線部ア～エの敬語の敬意の対象として正しい組み合わせになっているものを、次の中から一つ選びなさい。

30

	ア	イ	ウ	エ
①	公主	公主	氏忠	氏忠
②	公主	氏忠	観音	公主
③	氏忠	氏忠	公主	公主
④	公主	公主	観音	氏忠

問三　空欄a～dに入る語として正しい組み合わせになっているものを、次の中から一つ選びなさい。

31

	a	b	c	d
①	ぬ	ぬ	ぬる	ね
②	む	ぬ	なむ	ず
③	む	む	なむ	ね
④	ぬ	ぬる	ぬる	ぬれ

問四　傍線部A「かたみにとりあへずこぼるる涙」について、品詞分解として正しいものを、次の中から一つ選びなさい。

32

① 名詞＋助詞＋動詞＋助動詞＋動詞＋助動詞＋名詞

② 名詞＋助詞＋動詞＋助詞＋動詞＋名詞

③ 副詞＋副詞＋動詞＋助動詞＋名詞

④ 副詞＋副詞＋動詞＋名詞

問五　傍線部B「かならずふたたびあひ見るべき」とあるが、公主が氏忠と交わした約束の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

33

① 氏忠が公主への誓いを守り思いを貫き通す心を持ち続け、公主から授かった玉を失うことがなかったら、泊瀬寺で再会し唐の国に二人で帰ることができる。

② 氏忠が公主との約束をひと時も忘れず玉を肌身離さず持ち続け、泊瀬寺で観音の法力を授かり唐の国に帰ってきたら、正式に二人は一緒になることができる。

③ 氏忠が雨風や荒波に打ち勝って玉を日本に持ち帰り、泊瀬寺に奉納して願かけをしてから二十一日後に、非難がおさまり寺で二人は再会することができる。

④ 氏忠が玉を肌身離さず日本に持ち帰り、泊瀬寺にそれを持って行って二十一日間の修法を勤めたら、誰の非難も受けずに二人は一緒になることができる。

問六　Ⅰ・Ⅱの和歌に関する説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

34

① Ⅰは、氏忠が商山での夢のようにはかない公主との思い出を詠んだ歌で、Ⅱは、公主が氏忠に命がけで寄せる思いの激しさを詠んだ歌である。

② Ⅰは、氏忠が公主とのこの世での別れを嘆いて詠んだ歌で、Ⅱは、この世にとどまることを断念した公主が自分の身を嘆いて詠んだ歌である。

③ Ⅰは、氏忠が公主との別れのつらさを商山で詠んで贈った思い出の歌で、Ⅱは、氏忠との別れを決意した公主がその悲しみを詠んだ歌である。

④ Ⅰは、氏忠が公主と別れられない激しい思いを詠んだ歌で、Ⅱは、公主に思いが届かないことのつらさを氏忠が伝えるために詠んだ歌である

問七　出典の『松浦宮物語』の作者は、『新古今和歌集』の撰者として活躍した歌人だとする説が有力だが、それに該当する人物を、次の中から一つ選びなさい。

35

① 紀貫之　② 藤原俊成

③ 赤染衛門　④ 藤原定家

国語の問題はここまでです